

トピックス

徳島県におけるラッキョウのホモノハダニの発生

徳島県立農林水産総合技術支援センター なか の あき お
中 野 昭 雄

はじめに

徳島県の最北東部に位置する鳴門市鳴門町の大毛島ではラッキョウが栽培されている。鳴門の渦潮でよく知られている鳴門海峡に面した銀砂と呼ばれるミネラルを豊富に含んだ海砂で栽培するところが特徴である。‘鳴門らっきょ’というブランド名でも知られており、約70戸の農家が約30 haを栽培し、年間約500 tを出荷する。

近年、栽培期間中に発生し問題となっている病害虫は、*Fusarium avenaceum* (Fries) Saccardによるラッキョウ赤枯病とネダニ類であり、いずれも農家はその防除に苦慮している。特に、ネダニ類は卓効を示していたメソミル剤（商品名：ランネート DF）の製造が一時期、中止されていたことから、新たな農薬の登録拡大や化学農薬に頼らない防除方法が待望されていた。

このような中、本年5月に突如、ホモノハダニが生産現場の数圃場で発生した。これまで、ホモノハダニがラッキョウで発生し、問題となったことはなかったことから、本稿では本種の本県生産現場における発生状況と特徴について、紹介する。

I 発生経緯

前述したように、本年5月に鳴門市鳴門町で栽培されているラッキョウにおいて、赤茶色のハダニが多発生し、吸汁害により葉が白化（口絵①）、もしくは黄変症を示す株が出現した（口絵②）。これまでラッキョウにおいて、ハダニ類の多発生とこのような被害症状は確認されていなかったことから、鳴門藍住農業支援センターで発生状況を調査したところ、鳴門市鳴門町の31圃場のうち、21圃場でその発生が確認された。また、本種虫体を茨城大学後藤哲雄教授に同定依頼した結果、ホモノハダニ *Petrobia latens* (Müller) と判明した。なお、幸いラッキョウは収穫間近であったこともあり、葉が黄変した株の収量への影響はなかった。

II 発生要因

発生要因として、次の2点が考えられる。1点目は、本年5月の降水量が62.5 mmと平年（148.5 mm）に比べて少なく、半分にも満たない（以上、観測地点：徳島）ことが、多湿を好まない（BLODGETT and JOHNSON, 2002）本種の生息に適したものと考えられる。2点目は、前述したように近年、従来より農家がネダニ類の防除に慣行として利用してきたメソミル剤が利用できなかったことである。なぜなら、メソミル剤は本種にも高い殺虫効果を示す（兼田ら, 2012 a）ことから、ネダニ類防除に利用されたときには、同時に本種も防除されたが、利用されなかったときには、温存された可能性が高い。発生に圃場間差が大きいこと（口絵②）がその裏付けと考えられるが、農家の農薬使用履歴を確認できていないことから、あくまでも推察に過ぎない。以上二つの要因が相まって、本種の多発生につながったと考えられる。

III ホモノハダニの特徴

本種は、一見カンザワハダニや赤色型ナミハダニに似ているが、第1脚が突出して長いのが特徴である。雌成虫の大きさは体長0.6 mm×体幅0.5 mm内外で、成虫の生存期間は約15日である（KHAN et al., 1969）。体色は赤みがかった黒褐色で、成熟した成虫の体表は金属光沢を帯びる。背面から見ると楕円形で、側面から見ると背が盛り上がっている。胴背毛は短く、大部分は隣の胴背毛の起点には達しない。胴は細長く、第1脚は胴部と同長かやや長い。一般にはメスのみが存在し、単為生殖を行うが（SHARMA and SRINIVASA, 2004）、中国の一部ではオスも確認されている（Lu, 1979）。

本種の寄主範囲は広く、国内ではスカシタゴボウ、エンバク、オーチャードグラス、オオムギ、コムギ、コウゾリナ、タンポポ、ヒメジョオン、イチゴ、アカクローバー、アズキ、アルサイククローバー、アルファルファ、インゲン、シロクローバー、ダイズ、ネギの報告がある（EHARA, 1956；今林, 1971）が、いずれも大きな被害は認められていない。しかし、2011年3月以降、本県板野郡板野町、同郡上板町、同郡藍住町、吉野川市と美馬市のトンネル栽培のニンジン圃場で本種が確認され、中

Occurrence of Brown Wheat Mite *Petrobia latens* (Müller) on Shallot in Tokushima Prefecture. By Akio NAKANO
(キーワード：ラッキョウ、ホモノハダニ、砂地畑)